

電信の緩慢

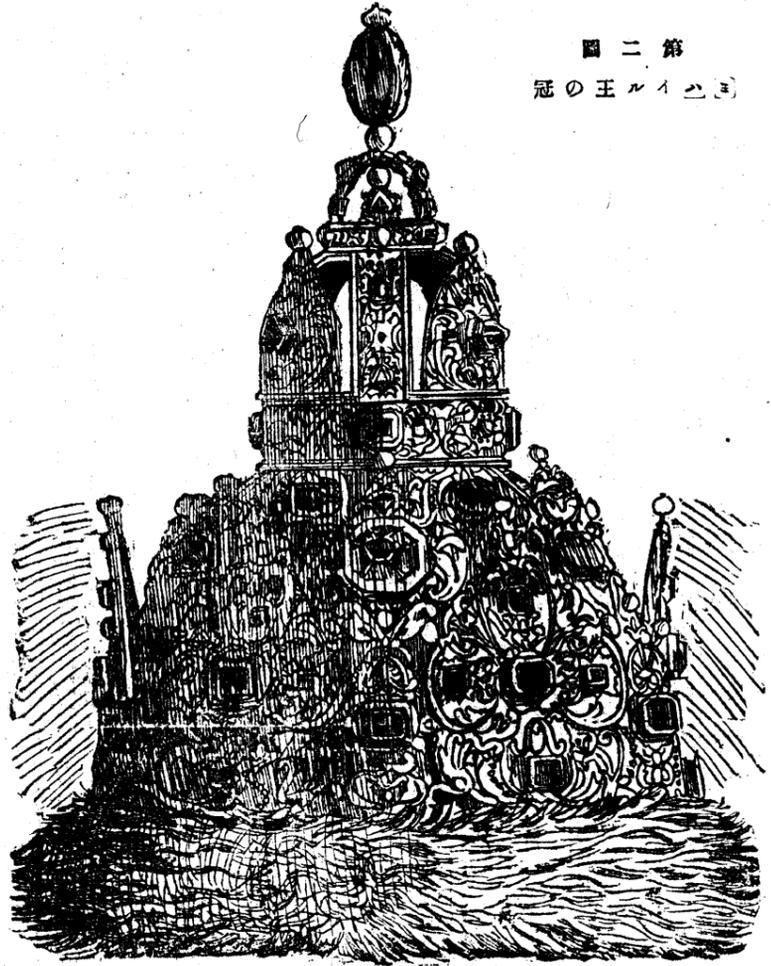
近年來我國の電信事業は非常に發達したるが如くなれども更に一步を進めて實に如何なる状態に於て其の進歩の速きとて事業の不整頓なる弊を可きものあり例へば東京大阪間の電信の如き其距離僅に三百五十六哩にして今の汽車の速力を以てするも尙ほ十八時間と費すに過ぎず若し途中に停車の時間と場所とを省き平均一時間三十哩の速力を出すとせば十二時間以内で着し得るものと雖も然るに此兩市間に聯絡する電信の緩慢は幾何の時間を要するかと云ふに往々七八時間を要すも少なからず其他東京函館間は八時三十分を要し七時七分、長崎は八時四十七分を要するものとあり是れは手近き二三の例に過ぎざればも若し細に穿鑿したれば尙ほ甚だしき延着を發見するもならん右の如く三十哩の速力を以てすれば十二時間にて旅行し得べき東京大阪間の短距離に於て七八時間を要すとせば僅々四時間の相違にして電信と汽車の速は何處に存するや殆んど區別を見る可らず彼の倫敦の電報が翌日の横濱新聞に記録せらるるに比すれば我國の電信は電報の相違にして固有の效能を失ふものと云ふも可なり文明の世界は時は金の輪に漚れず一割半金も惜まらざる今の社會に堪へ難き次第なりと云ふ可し左れば我輩は政府が適に適當の處置を施し此不都合を改めんとすを望むものにして電信の經濟を獨立せしめ一定の經費を豫算に仰ぐの任意を避け收入を以て事業の擴張を自由ならしむるが如き自から一法なればも若し法律の規定如何とすも能はずとせば此際断然電信と民衆に附する方針を定め一切の機關を實に民間に營業せしめては如何或は交通機關の國有民有論を云々し現に英國の如き自由主義の國にても電信は國有として政府にて營業するの例なりと民衆に反對の説もあらんかなれども本國固有の利害得失論は政府が充分に管理する責任を盡したる上の事なれば英國の電信は國有に相違なければも其管理の實際は恰も商人が自家の營業に忠實なるを一般真實主義に由りて管理せらるるの事實を忘る可からず若し日本は政府にして英國の政府に等しく電信の取扱上に人民の便否を顧みず經營する營業主義を取らんに我輩ども亦より異論なしと雖も今日の如く電信營業の時間と距離の往復に比して格別の相違なき程の緩慢を極めながら其管理者たるものが恬として省みざる始末にては事あるを民衆に附するの得策なるを認めざるを得ず我輩は敢て難きを責むるものに非ず政府にして爲し能ふならば速に其不便を改むるか若し爲し能はずとせば断然營業して民衆たらしむるか二者その一に出でんことを通告するのみ

○首相の慶行と隨行員の喜び 伊藤首相は慶應義塾の序でに慶應へも立寄るものとしたりたるが其隨行員は慶應の海のみならず内地旅行なる故其旅費も少なからず一衣帯水も備へて慶應に立寄るものとしたりたるため外慶行となり爲めに旅費も大に増加する故隨行員は意外の喜びをなす居れり

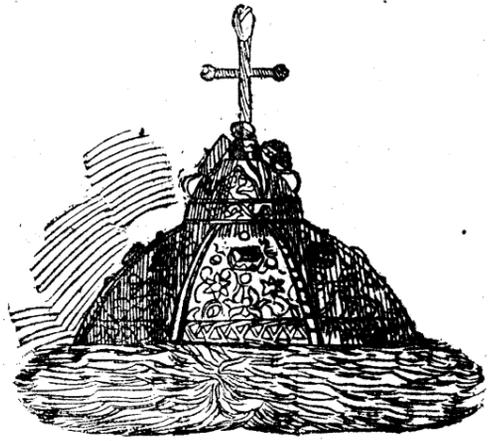
露國帝室の寶冠

此處に掲げたるは露國帝室の寶冠にして第一圖はロマノフの冠と稱し露國先代リニョラツク帝統中モノマフ王の冠と稱し給ひし寶冠なり王は十一世紀頃の人にして先代帝統中眞の主として知らる先代帝統は十六世紀に至り惜しくも斷絶せしを以て當時の貴族ロマノフ家入て帝統を襲ぎたり即ち

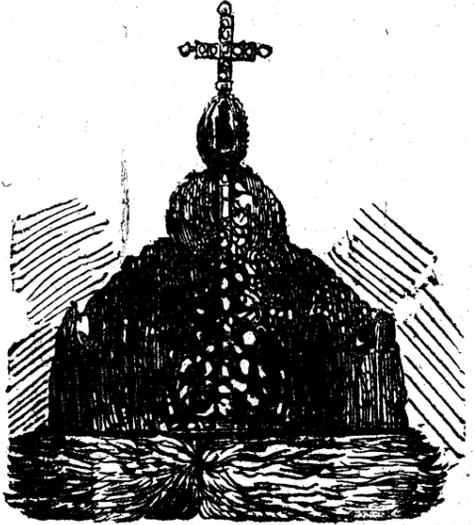
第二圖 露國王ルイ十四世の冠



第一圖 露國王ロマノフの冠



第三圖 露國大帝大イタリシの冠



○支那に對する露國 英國スタンレー伯林通商員が成る確かなる筋より聞き得る云ふに據れば李鴻章が露國密約の批准を懇請し命を帯びたりと云ふ風説は事實無きなれば東を結ぶ全權を委ねられしは確實にして支那に開港場を増加し露國の商業に開放せしめたる露國の船隻に限り出入を許す港灣をのみならず支那内地の商業をも一手に掌する子、鴨綠の二江を初め其他の數川に沿つて支那を設立するの特權を收め又西伯利亞の貝加爾州を横斷して支那の或る不凍港に鐵道を敷設するを得るを望めり但し其不凍港に就て露國の順口なる可ければ各國の故隙を惹起すべしと云ふ之を彼の鐵道の極點とするも獨占せしめざるに其附近に於て一港を得、爰に滿洲を延張して軍港とし東洋艦隊の根據地となするが如しと云ふ

夜汽車の犯罪

○第二回慶應義塾同窓會 昨午の紅茶館に開きたりし慶應義塾出身者の同窓會は毎年の之を開く事を決したるを以て其第二回日午後三時より紅茶館に開會する由目下下から其未だ深からずして集會の好時候ゆて多かる可しと云ふ

○砲工學校學生の歸隊期 陸軍砲工學校第四期學生は同校條例に依りて來る十一月十二日の官一兩日前陸軍大臣は公達せり

夜汽車の犯罪 擲月庵主し 第四十四回 嗚呼、我を殺し、少女は兄の命を過り、直に、吹消した上なる男は、燈を照らして、早や梯子を上げるにぞ、代吉は燈の邊を探れども、用心、ピストルは既に、取去られたる後、鏡は顔色蒼然、宛然死せるもの、如くな眼、眼、隠し持たる彼のピストルの、梯子の下、息を殺して事の成行を、待ち居る

梯子の下の、彼の箱の後に、隠れるる一すれば、探偵は妹の耳に口、兩人等しく歩を過斯の伏撃をせし、探偵兄弟と驚きさるるか

一聲、正しく、三人續て降り來り一人が、口より出でし叫び聲、三箇の聲を横りつゝある、代吉はた彼が面部を止され、早く止まれ、早く止まれと命がねへ見ろ、斷けぬが

と名探偵の顔と、覗みたる面、見れば、身丈高き大男、青銅鏡の奥には、鏡さ、りけり、代吉常の如く、屈曲の體にして、心に引けのなかせば、何の相手の三人、出るは易しと、逃る心も押えねばならぬ、を如何にせん、左なきだに其逃る心も、ば、種、の逃げさくするに及ばず、山、向ひに立たる黒威の、三人が顔は、